

内容別索引

第1～6号

出版

- 樽本 照雄 金港堂・商務印書館・繡像小説 3号74頁
 澤田 瑞穂 閑談『繡像小説』 4号5頁
 沢本 郁馬 商務印書館と夏瑞芳 4号112頁
 中華書局創立までの陸費逵 5号48頁

金松岑

- 楊 友仁 金松岑先生行年与著作簡譜 6号63頁
 金松岑アルバム 6号67頁

李伯元

- 麦生登美江 李伯元の創作意識 1号41頁
 李伯元の『南亭四話』について 2号43頁

- 魏 紹昌 《冰山雪海》是冒名李伯元編
 訳の一本仮貨 3号1頁
 楊 世驥 冰山雪海 3号5頁
 吳 泰昌 《庚子国変彈詞》碎語 5号3頁
 入谷 仙介 永井禾原と李伯元 5号8頁
 樽本 照雄 遊戯主人選定『庚子蕊宮花選』
 5号15頁
 『官場現形記』の真偽問題 6号12頁

清末小説研究会

李伯元研究資料目録 5号71頁

劉鉄雲

- 樽本 照雄 『老残遊記』試論 1号27頁
 清末小説研究会
 劉鉄雲研究資料目録 1号87頁

林琴南

- 馬 泰来 林紓訳書序文鈎沈 6号84頁

歐陽鉅源

- 麦生登美江 歐陽鉅源とその作品 6号27頁

彭 俞

- 亜東破仏彭俞アルバム 5号1頁
 彭 長卿 亜東破仏伝略 5号26頁

秋 瑾

- 秋 瑾 滬上有感 4号1頁
 麗 沢 生 秋瑾自筆「滬上有感」のこと
 ども 4号3頁
 横山 弘 秋瑾「滬上有感」試訳 5号40頁
 魏 紹昌 秋瑾の芸術形象永垂不朽 6号45頁

話劇《鑑湖女俠》アルバム

6号59頁

吳趸人

中島 利郎 吳趸人伝略稿 1号64頁
吳趸人研究資料目録

3号114頁

魏紹昌編『吳趸人研究資料』
について 5号52頁

麦生登美江 吳趸人の『近十年之怪現狀』
と『情變』について5号60頁

徐念慈

武田 雅哉 東海覺我徐念慈『新法螺先生
譚』をめぐって 6号1頁

曾孟樸

曾孟樸アルバム 2号1頁

樽本 照雄 曾孟樸の青春 2号60頁

曾孟樸の修学 4号85頁

曾虚白氏のこと 2号75頁

清末小説研究会

曾孟樸研究資料目録2号78頁

麦生登美江 金松岑と曾樸の『孽海花』
3号61頁

賽金花アルバム 4号67頁

魏 紹昌 關於賽瓦公案的真相4号73頁

澤田 瑞穂 清末の小説 1号1頁

清末文学の一隅 1号81頁

中村 忠行 清末探偵小説史稿1～3
2号9頁／3号10頁／4号10頁

樽本 照雄 魏紹昌氏のこと 3号7頁

清末小説研究会

四作家研究資料目録補遺1

6号91頁

編集ノート

▼極たまに、清末小説研究会に入会したい、とおっしゃる方がいる。ありがたいことだ。しかし、残念ながらご希望にそうすることができない。なぜならば、清末小説研究会という組織は存在しないからだ。組織がない以上、会則もなければ定例研究会も行なっていない。雑誌『清末小説研究』は機関誌を装ってはいるが、その実体は樽本の個人雑誌なのである。個人雑誌であるから、編集、校正、発送、集金、印刷費支払いをすべて一人で行なう。いわば、たった一人の研究會だ。だから、清末小説研究会という名称は、私の筆名であるといってもいい▼創刊当時、またそれ以降も個人的に御祝儀をいただいたことがあり、うれしく感じた。他人との関係で自己が規定されるとすれば、『清末小説研究』に対して他の人々がどういう反応を示すか、それを知ることは自分が自分であることの証明に役立つ。これが文章(片言隻語を含めて)で公表されていればなおさらのことだ▼1977年10月1日付の創刊号を出してから最初に反応を示したのは日本国内ではなく、香港であった。黎活仁「日本新出版的『清末小説研究』」(『天地叢刊』創刊号1978.9.20)は、『清末小説研究』の目次を紹介したあと、樽本照雄の「繡像小説」「月月小説」等の総目録、中島利郎「雑誌所収清末小説関係文献目録」を例にあげ、「日本の学者が清末小説という領域にとりくむ方法と興味をうかがわせ

るに足る」と評する。また、「劉鉄雲研究資料目録」についても、「この種の仕事は日本の学者が重視するもので、しかも『老残遊記』研究上のひとつの進展であることは疑いない」と述べた▼中野美代子「〈阿英『晚清小説史』翻訳〉解説」（阿英著、飯塚朗・中野美代子共訳『晚清小説史』平凡社1979.2.23, 395頁）では、本誌の創刊に触れる▼1978年に香港で出版を開始した月刊雑誌『開卷』があった。書評、作家訪問、出版情報、読書談、作家と作品研究等を主たる内容とし、1979年5月号（総第7期）まではA5判、各160頁の大冊、第2巻第1期（総第8期）よりほぼA4判に誌面を拡大し各50～60頁（1980年8月号第3巻第3期総第20期まで所有）。写真を多数掲載し、内容ともに読みごたえのある雑誌で、資料的な価値も高く郵送されてくるのをいつも心待ちにしていたもののひとつであった。その1979年8月号（総第8期）で心田が「『清末小説研究』（日文）第2号出版」と題して、曾孟樸の珍しい写真が掲載されていることを紹介した。すでに停刊しており、さびしい▼1980年12月、中国文芸研究会訪中団の一員として、上海、杭州、紹興、広州を回り香港に出て帰国という、書物探求の旅を行なった。中国の雑誌類は書店には置いてない。郵便局か街のところどころに設置された「書亭」というスタンドで売られている。呉趺人の筆名我仏山人でなじみのある広東省南海県仏山市の祖廟を訪ずれた時、入口に書亭があった。のぞくと『書林』の1980年第5期（総第7期1980.10）が目につく。『書林』隔月刊は今でこそ定期購読ができるが当時はまだ日本へは輸入されていなかったし、『読書』月刊と同じく1979年創刊の書評誌で、以前か

ら注目していた雑誌である。同誌に掲載された許文煥「晚清翻訳偵探小説一瞥」が、中村忠行「清末探偵小説史稿」を紹介している。ただ、許の文章についてはのちに馬泰来が同誌1982年第1期（総第15期1982.2）に書いた「林紘閑談」において、「資料は主として中村忠行の文章から引いている」と評した▼「清末小説研究会通信」というハガキ通信を気ままに発行している。その題目は本号の表二をごらんいただくとして、その第8号が翻訳された。漢祥訳「日本学术界関注蔣逸雪等の劉鶚研究活動」（『揚州師院学報〈社会科学版〉』1981年第2期1981.6）というのがそれで、コピーを香港大学の黎活仁氏よりいただいた。劉鉄雲に関する文章が中国で再び発表されるようになった事をいくつかの論文名をあげて紹介する内容なのだが、それにしても「日本の学术界」とは恐れ入る▼本誌第4号には中村忠行氏ご提供の新出史料「秋瑾遺墨」を掲載した。この「秋瑾遺墨」を中国の読者に紹介した徐培均「關於秋瑾的一首佚詩」（『學術月刊』1981年8月号未見）があるということを知り、横山弘氏から教わった▼馬泰来「林紘翻訳作品全目」（『林紘的翻訳』北京商務印書館1981.11）には参考書目に中村忠行「清末探偵小説史稿」があげられる。李翰「説刪書」（『羊城晚報』1981.11.13初出未見。『新華文摘』1982.1, 259—260頁）、姜徳明「『孽海花』及其他」（『書辺草』浙江人民出版社1982.1, 278頁）あるいは、本誌第5号所載、入谷仙介「永井禾原と李伯元」を紹介した王延齡「李伯元和日本詩人」（『新民晚報』1982.7.28）などがある▼日本における古典文学研究紹介の一環として清末小説研究に言及した徐允平「日本近年中国古典文学研究述略」（『文

学評論』1981年第5期1981.9.15)は注目にあたいする。「日本の学界は中国清末文学について相当重視しており、近年、『清末小説研究』のような専門定期刊物も出現した」と書き始められる清末文学研究の章では、中村忠行「清末探偵小説史稿」について、「十万余字の長さに達し、主として清末の翻訳探偵小説に関して詳細な研究を行なっている。文中に収められた内外の関係資料は豊富で、専著である」と述べている。中島利郎「写情小説『恨海』(『啾啞』第12号)の分析を詳しく紹介し、麦生登美江「『孽海花』二十回本と三十回本との字句の異同について」(『野草』第25号)を手ぎわよく要略する。樽本照雄「劉鉄雲の友人たち」(『野草』第17号)、「曾孟樸の青春」(本誌第2号)、「天津日日新聞版『老残遊記二集』について」(『野草』第18号)にも触れている。うれしかったのは、資料目録にわざわざ紙幅を割いていることだ。「清末文学資料がかなり散乱している情況にねらいを定め、日本の学者は資料整理の面で一貫してわりあい気を配ってきた。近年の成果には、中島利郎『吳趼人研究資料目録』(『野草』第20号)、清末小説研究会『曾孟樸研究資料目録』(本誌第2号)、同会『劉鉄雲研究資料目録』(本誌第1号)等があり、それらはかなり全面的に集めら

れた総合資料である。特にその資料の来源には国際性が備わっており、これは我が国の同類資料が一般に国内に限定されているだけという欠陥を補うことができる」清末小説に関して、日本で資料目録を作るなどという、いわばおこがましい事を行なっているのは、必要に迫られての無鉄砲でしかない。それを「総合資料」だ、「国際性が」と書かれると、当然のことながら自尊心を傷つけられる人も出てくる。前出、李翰「説刪書」には、「ただ、清末の何人かの著名作家、たとえば吳趼人、曾孟樸、劉鉄雲等については、収録された研究資料は比較的完備している。私はみだりに卑下するわけではないが、中国人の聡明な才智は決して日本の友人に劣るものではないと信じる」と書かれており、心中察するにあまりある。研究の基礎は原資料を収集し、それを整理することにあることを氏は充分に認識している。だからこそ、なぜその作業が中国においてなされないのか、といういらだちが引用文の言葉になったものと想像される▼本誌の編集方針はただひとつ、私の読みたい文章を掲載することだ。好きにやっていることだから、本誌の発行は、私にとっての盆であり、正月であり、年に一度のお祭りだ。

清末小説研究 第6号

発行日■1982年12月1日

実費■980円(送料200円)

編集兼
発行人■樽本照雄

印刷所■早稲田大学印刷所

発行所■清末小説研究会

〒520 滋賀県大津市

打出浜8番4-504

樽本照雄方

振替 大阪 9-40475

中国文芸研究会

野草既刊号

創刊号	魯迅特集	1,200円
第2号	清末小説研究	350円
第3号	現代中国文学	350円
第4号	中国の古典文学と現代	350円
第5号	魯迅特集(2)	350円
第6号	五四時代の文学	350円
第7号	中国文学と日本の教育	350円
第8号	三〇年代文学	400円
第9号	魯迅特集(3)	400円
第10号	解放区の文芸	400円
第11号	日本の現代文学と中国	400円
第12号	作家論	400円
第13号	魯迅特集(4)	400円
第14・15号	三〇年代文学(2)	800円
第16号	仙台における魯迅の記録	800円
第17号	日中文学交流の一断面	800円
第18号	近現代中国文学	1,200円
第19号	魯迅特集(5)	1,200円
第20号	近現代中国文学	1,200円
第21号	魯迅特集(6)・四人組批判後の 中国文学	1,200円
第22号	近現代中国文学	1,200円
第23号	文学の現在	1,200円
第24号	読書の日日	1,200円
第25号	文学の現在(2)	1,200円
第26号	特集 資料	1,200円
第27号	創刊十周年記念号	4,500円
第28号	人と書物を旅する	1,200円
第29号	魯迅特集(8)	1,200円
第30号	茅盾特集	1,200円

采 華 書 林

野草第29号

中国文芸研究会

〒533 大阪府大阪市東淀川区大隅 8-1-3
 〒574 大阪府大阪市東淀川区大隅 8-1-2
 〒574 大阪府大阪市東淀川区大隅 8-1-4
 〒574 大阪府大阪市東淀川区大隅 8-1-8

「補天」における女媧のイメージ	是永 駿
欧陽山と魯迅	阪口 直樹
魯迅の祖父周福清(下)	村田 俊裕
「摩羅詩力説」材源考ノート(17)	北岡 正子
文革後に出版された魯迅の著作・研究書目録(初稿)	中国文芸研究会編
アルバム・蕭紅ゆかりの土地と人びと	
蕭紅をめぐる人びと	平石 淑子
第三種人論争の問題点	谷 行博
中国児童文学小史(3)	新村 徹
『文化大革命』期の巴金	嶋田 恭子
野草きまま放談(第27号合評)	阪口 直樹
一九七九年中国文学雑誌作者作品目録(N~Z)	
	高島俊男/伊藤和子/江崎瑞枝

■ 1200円 (送料 200円)

野草第30号

〒464 名古屋市中区末盛 4-1-8
 〒517 名古屋市中区末盛 4-1-17

千種区末盛 4-1-4
 振替名古屋 17

采
華
書
林

《多角関係》の手法	清水 茂
茅盾と“文芸工作者宣言”	阪口 直樹
茅盾初期文芸思想の形成と発展(1)	青野 繁治
『腐蝕』の機能について	鍋山ちづる
茅盾『走上崗位』日本翻刻本前言	魏 紹昌
茅盾作品中における『走上崗位』の位置	是永 駿
「摩羅詩力説」材源考ノート(18)	北岡 正子
『補天』の成立	石原 一彦
王蒙作品における感覚の世界	小島 文
王蒙小説にみる主題構成と手法	美船 清
中国児童文学小史(4)	新村 徹
蕭紅をめぐる人々(2)	平石 淑子
丁玲生平若干問題的考訂与《太陽照在桑乾河上》の草稿、版本及其修改	王中忱/尚俠

■ 1200円 (送料 200円)

茅盾 走上崗位

一九八二年三月二十七日發行
定價二七〇〇円

茅盾…まぼろしの長篇小説『走上崗位』
太田 進

茅盾は、一九四三年から四四年にかけて、『文芸先鋒』誌に、この小説を連載した。ぼくらが読むことができなかった、全十二章のまぼろしの長篇小説を、中国から提供された原稿によって刊行する。
この小説について、茅盾自身、「重慶でかいた（内容はあらまし民営工業が沿海都市から奥地へうつされるもの）、未完です。どこにのせたかは、さだかにおぼえていません。わたしはこの原稿に不満で、まだ控えをとって、おりません」と、葉子銘あての手紙にかいている（一九七八年二月十九日付）。『文学評論叢刊』第八集、「關於茅盾生平的若干問題」所収）。
『内容からみれば、この小説は、『第一段階の物語』（一九三八年）のあとをうけ、『清明前後』（一九四五年）にひきつがれ、さらに『鍛錬』（一九四八年）五部作に集大成されるはずであったものだ。
なるほど、この小説は未完成である。しかし、作者の死によって、もはや作品の完成をのぞむことが不可能になつたいま、抗戦期茅盾の創作過程をさぐるうえで、不可欠の作品として、茅盾自身の不満をしりつつも、あえて刊行するにたると信ずる所以である。

日本での翻刻をよろこぶ
魏 紹昌

△持ち場につく▽は、祖国の西南、多霧の山岳都市で創作された。正に、災難の重くのしかかる戦争という環境の中にあつて、掲載された雑誌は発行部数が極端に少なく、印刷された紙質もまた極度に悪かつた。そのため広く伝わることはなく、保存も容易ではなかつた。また後に単行本で出版されたこともなければ、はなはだしくは解放後、△茅盾文集▽にも収められなかつた。光陰は矢の如く、指をおつて数えてみればすでに三八年を経ており、国内外の多くの青年読者が茅盾先生がこのような長篇小説を書いていたとは知らないのも無理はない。茅盾先生逝去一周年を記念するにあたり、今、日本の友人が△持ち場につく▽を翻刻し、美しい隣国の大地に再び花を開かせたのは、実のところまことに意義のある仕事である。（日本翻刻本前言より 沢本香子訳）

発行 中国文芸研究会 〒533 大阪市東淀川区大隅2-2-8 大阪経済大学 振替大阪8-38746

発売 采華書林 〒464 名古屋千種区末盛通4-17 藤栄ビル2階 振替名古屋4185